

～突撃★ドメーヌ最新情報！！～

◆VCN°62 ジャン・マルク・ドレイヤー

生産地方：アルザス

新着ワイン7種類♪

AC アルザス・シルヴァネール オリジン 2018 (マセラシオン)

2018年はブドウが早熟で、かつてないほど収量に恵まれた年！だが、ジャン・マルク曰く、醸造は、発酵に勢いがなかったためボラティルの上がるリスクが常にあり、想像していた以上に難しかったとのこと。結局発酵に3ヶ月を要したが、途中ボラティルも収まりつつ、最終的にしっかりと発酵を終わらせ完全辛口に仕上げることができた。出来上がったワインは、アルコール度数12%と優しくフルーティーで、鼻に抜ける桃のフレーバーが華やか！白い果実のエキスに溶け込むタンニンも優しく、まるで桃を皮ごと搾ったジュースを飲んでいるみたい！シルヴァネールのマセラシオンの美味しさがダイレクトに伝わるワインだ！

AC アルザス・リースリング オリジン 2018 (マセラシオン)

ジャン・マルクのマセラシオンの原点リースリング・オリジン！リースリングは2018年の収穫中で一番遅い、9月28日だった。発酵が一番長く7ヶ月を要したが、どうにか完全辛口に仕上げることができた。ワインは前年よりも味わいに落ち着きがあり、透明感のあるエキスの中に塩気のある凝縮した旨味、洗練されたミネラル、強かな酸、そしてキメの細かいタンニンがそれぞれ主張し、複雑な味わいを呈している！ジャン・マルクが仲間のヴィニヨロンにブラインドで飲ませると、多くのヴィニヨロンがジュラの白と勘違いするそうだが、確かに、酸はあるがミネラルが鉱物的で透明感のある落ち着いた味わいはジュラのシャルドネっぼい！？

AC アルザス・ミュスカ オリジン 2018 (マセラシオン)

2018年はかつてないほど収量に恵まれた年！だが、醸造は、シルヴァネール同様に発酵に勢いがなく、ボラティルのコントロールが非常に難しい年だった。ミュスカは特にマセラシオンの時点でマロラクティック発酵が始まってしまい、発酵のスタートから常にボラティル上昇のリスクにさらされていた。ジャン・マルク曰く、ボラティルは多少上がったが、それに負けないポテンシャルがワインにあるので、味わい的には全く問題がないとのこと。出来上がったワインは、ライチやパッションフルーツの香りがとても華やか！味わいもフルーティーかつスパイシーで完全辛口なのに桃のような優しい甘さを感じる！後からじわっと広がる強かな酸も白い果実のエキスときれいに融合し、心地よいアクセントとなっている！ボラティルが絶妙なバランスに収まったまさにナチュラルファンの感性をくすぐる官能的なワインだ！

AC アルザス・ゲヴュルトラミネール オリジン 2018 (マセラシオン)

品種的に繊細で花ぶるいや病気に遭いやすいゲヴュルト。だが、2018年は久々に開花が上手く行き、最終的に収量が65hl/hLと未だかつて経験したことのない量のブドウに恵まれた！醸造も、2018年は全体的に白の発酵に勢いのない傾向の中、ゲヴュルトだけはボラティルの問題が一切なく、比較的早く順調に発酵を終わらせることができた。出来上がったワインはフルーティーでボリューム感があり、鼻に抜けるジンジャーや金木犀の香りがとても華やか！味わいにジンジャーのようなスパイシーな辛みがあるので、エピスの効いた料理との相性が良さそうだ！

AC アルザス・フィステラ 2018 (マセラシオン)

前回までゲヴュルトとピノグリを最初のブドウの段階で一緒に混ぜ合わせ仕込んでいたが、今回からコンセプトを変え、キュヴェ・オリジンとして単独で仕込んだ各ワインを最後の瓶詰前にアッサンブラージュすることに

した！前回のようにはゲヴェルツとピノグリをベースにし、あとは味わいを整えるためにリースリング、そして香りにアクセントをつけるためにミュスカを今回加えた。この最後にアッサンブラージュする方法は、長年ジャン・マルクが実践したかったこと。彼自身は同じテロワールなのに品種ごとにキュヴェを分けることに意味があるのか？と今でも自問しながらワインをつくり続けている。現在オリジンは品種ごとに分けて仕込んでいるが、将来的には全てアッサンブラージュしひとつのオリジンとしてリリースすることも視野に入れている。まずはこのフィステラを通して彼の今後のワインスタイルを少しずつ見せていくつもりなのだ！

AC アルザス ピンク・ボン 2018 (マセラシオン)

今回 2 回目のリリースとなるピンク・ボン！2017 年はピノグリとピノノワールの熟すタイミングが異なったため別々に仕込み、熟成の時点でアッサンブラージュをする予定であったが、あいにくピノグリがボラティル上昇によりお酢となってしまったためリリースを断念した。今回の 2018 年は、熟すタイミングがほぼ同時期だったので、ブドウの時点でアッサンブラージュしている。熟成は、前回の 2016 年は 600L の樽を使用したけど、今回は量があったので 18hL のフードルで熟成させている。出来上がったワインは、前回のようにはチャーミングで薄ウマ系のピノノワールの味わいは健在だが、2018 年は日照量に恵まれた年ということもあり、よりスパイシーに仕上がっている！ジャン・マルク曰く、ウォッシュ系のチーズ、特にモンドールやクリーミーなマンステールとの相性は抜群とのこと！

AC アルザス・ピノノワール エリオス 2018 (赤)

Anigma (アニグマ) がテロワールを表現した赤ワインに対し、Elios は気軽に飲めるヴァン・ド・ソワフをコンセプトにつくられたワイン！前回はきっちりタンクを密閉しマセラシオンカルボニックで仕込んだのだが、2018 年はどのブドウも豊作だったためタンクが足りず、急遽 Benne (ベン) と呼ばれる蓋のない収穫用カーゴトレーラーを使用しミマセラシオンカルボニックで仕込むこととなった。そんなバタバタした感じの中で醸造されたエリオスだが、前回同様に官能的な赤い果実のハーモニーが絶妙なヴァン・ド・ソワフにきちんと仕上がっているところはさすがジャン・マルクだ！まさに「太陽のように明るく風のように軽やかなワイン」というキュヴェ名のコンセプトにふさわしい魅力あふれるワインだ！

ミレジム情報 当主「ジャン・マルク・ドレイヤー」のコメント

2018 年は、猛暑と日照りが続いたにもかかわらず、ブドウの収量は未だかつてないほど豊作に恵まれたミラクルな年だった。冬は雨が多く寒さもしっかりとあり順調なスタートだった。春になると雨は止み、発芽も例年より 2 週間ほど早かった。開花も順調。病気もほとんどなく、また春に霜が降りなかったこともあり、開花の時点ですでに豊作が期待された。しかし、夏に入ると本格的に暑く乾燥した天候が続き、ブドウ畑は水不足が心配された。さらに 7 月、8 月は気温が 40 度を超える猛暑にも見舞われ、例年よりも早かったブドウの成長ペースにもブレーキがかかり始めた。このまま日照りが続くと収量の大幅減が心配されたが、幸いにも 9 月の初めにまとまった雨が降ってくれたおかげで、ブドウも息を吹き返し、そのまま完熟に向かった。結果的に収穫は未だかつてない大豊作で終わらせることができた。一方、醸造面はブドウの窒素不足により発酵に苦戦した年だった。マセラシオンをしたワインは辛うじて全て年内に辛口に仕上げることができたが、ダイレクトプレスの白ワインは発酵が終わらず年を越してしまった。

「ヨシ」のつ・ぶ・や・き



写真① 新たに植樹されたリースリング

これはジャン・マルクのリースリングの畑の写真（写真①）で、垣根の間に新たに苗が植樹されている。地球環境と畑の生態系をリスペクトするジャン・マルクは、かつて土起こしや散布作業に使っていた大型トラクターの使用を8年前に完全に止め、そのトラクターの通り道だったところに新たに植樹を施した。彼自身、新たに植樹する場合は、たとえ垣根の間であっても7年間休閑させてから植えるようにしている。大型トラクターが土に与える重圧は大きく、作業を重ねた分地表の植物や微生物の生態系が壊されてしまっているので、生態系を元に戻すには7年くらいの休閑が必要と彼は考えている。現在、土起こしの作業は大型トラクターに代わり彼がブリコラージュした1mの垣根幅でも通れる小型の軽量トラクターを必要に応じて使用し、散布はトラクターを使わず手作業で行っている。だが、彼自身は重さ500kgにも満たない小型トラクターでも地球環境を考えると満足が行かず、現在は土起こし自体の回数を大幅に減らし、将来的には馬による作業の導入を真剣に考えているような状況だ。

植樹した苗を見渡すと、何やらブドウの苗とは少し形が違う細長い枝のような苗が目に入った。（写真②）彼に聞いてみたところ、リースリングの植樹と一緒に15m間隔でCormier（ナナカマド）の樹も植えたのだそうだ。「ナナカマドの樹は、今はほとんど見かけないが、昔ヴィニョロンがまだポリカルチャー（同時栽培）を行っていたころによく見かけた多様性に欠かせない木の一つだ。ナナカマドを植えた理由は、畑環境に多様性をつくることと、ブドウを近年の温暖化による猛暑から防ぐことの2点。この樹のメリットは、他の果物のよりも葉の密集度が少なく、日陰をつくるのと同時に隙間から優しい日光が絶えず地表にこぼれる点がある」と彼は語ってくれた。ちなみに、このナナカマドは赤色の実をつけるのだが、タンニンが強いため食用には向かず、昔は何とシードルやワインを長く保存させるためにわざと混ぜることもあったそうだ。



写真② リースリングの畑に植樹されたナナカマドの樹



写真③ リースリングの畑に点在するタヌキの巣穴

もう一つ、何やらリースリングの畑にはあちらこちらに写真のような大きな穴が見られる。（写真③）この不思議な穴…何とタヌキの掘った巣穴なのだそうだ！まず、タヌキがモグラのように巣穴を掘るということ自体全く知らなかったが、このように広く畑全体に点々と存在する穴は全て地中でつながっているというから驚きだ。「リースリングの畑が穴だらけになっているけど大丈夫？」と彼に質問をしたところ、彼はこう答えた。「リースリングの畑は法律上私の畑だが、野生動物たちにとっては法律など関係ない。タヌキは夜行動物で、日中我々が見かけることはほとんどない。彼らはブドウを食べ漁る害獣でもないし、せつかく静かな寝床を見つけたのだからそっとしてあげた方がよい」と。この時ばかりは

彼が聖フランシスコ・ザビエルに並みに神々しく見えた！（2020.2.3.ドメーヌ突撃訪問&6.28.突撃生電話より）

※弊社HP「フォト・ギャラリー」より、カラーでサイズの大きい鮮明な写真をぜひご覧くださいませ